宮崎大学教育学部紀要　第 96 号　(2021)　130-145 頁

宮崎県内におけるウッドスタート事業の実態と課題について

篠原久枝 [1)]・小林まどか [2)]

Current Situation and Issues of the Wood Start Program in Miyazaki

Hisae SHINOHARA[1)] and Madoka KOBAYASHI[2)]

要　旨

「ウッドスタート事業」とは，東京おもちゃ美術館／認定 NPO 法人 芸術と遊び創造協会（旧認定 NPO 法人　日本グッド・トイ委員会）が展開している「木育」の行動プランの一つである。2016 年当時, 宮崎県内では 2 自治体が「ウッドスタート宣言」をしており，ウッドスタート事業実施自治体，未実施自治体，実施自治体の保護者の三者の立場からその実態と課題について検討した。実施自治体の「誕生お祝い品」には，自治体の子育てや木育についての思いが込められており，保護者も肯定的に捉えていた。さらに木育イベントへの参加意識や郷土への愛着も高まっていた。一方で，形状や配布時期に関する課題や，森づくりへの認識にはつながっていない課題も明かとなった。未実施自治体においても，独自の誕生祝い品や木育プランに取り組んでいる自治体もみられた。保護者は,「ウッドスタート事業」は子育て支援にも有効と捉えていた。従って,「ウッドスタート事業」は実施自治体において一定の成果を果たしたと言える。

キーワード：木育（mokuiku），ウッドスタート事業（wood start program），誕生祝い品（birth celebration goods）

1．緒　言

日本の森林面積は約 2,500 万 ha であり，国土面積に占める森林面積は約 66％と高く，木造建築を始めとする伝統的な「木の文化」が継承されてきた。しかしながら，戦後，不燃化・耐火建築化のため，鉄やコンクリートを使用した建築物の増加や，輸入建材の増加，林業従事者の高齢化，地球温暖化などの森林を巡る問題も顕在化してきた。

[1)] 宮崎大学教育学部，[2)] 滋賀県長浜市立長浜小学校

このような状況の中で,「木育」ということばが2004（平成16）年に北海道の「木育推進プロジェクトチーム」の中で検討され使われた[1)]。ここでは「子どもをはじめとするすべての人が『木とふれあい，木に学び，木と生きる』取組である。それは，子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて，人と，木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むこと」[1)]とされている。一方，林野庁は2006（平成18）年の「森林・林業基本計画」[2)]の中で,「３　林産物の供給及び利用の確保に関する施策　（３）企業，生活者等のターゲットに応じた戦略的普及　①企業，生活者等のターゲットに応じた戦略普及」として,『市民や児童の木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため，多様な関係者が連携・協力しながら，材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ,「木育」という言うべき木材利用に関する教育活動を促進する』と明記した。2016（平成28）年の「森林・林業基本計画」[3)]では,「持続可能な社会の構築に果たす森林・林業の役割や木材利用の意義に対する国民の理解と関心を高める取組を推進する」とされており,その具体的な活動として『小中学校の「総合的な学習の時間」における探究的な学習への学校林等の身近な森林活用など，青少年等が森林・林業について体験･学習する機会の提供や，木の良さやその利用の意義を学ぶ活動である「木育」を推進する』と明記され,「木育」は教育活動の一環として位置付けられた。

「日本グッド・トイ委員会」は1985（昭和60）年に子どものための優良玩具「グッド・トイ」の選考団体として設立され，2017（平成29）年からは「認定NPO法人 芸術と遊び創造協会」となった[4)]。東京おもちゃ美術館／認定NPO法人 芸術と遊び創造協会が展開している「木育」の行動プランに一つに「ウッドスタート事業」[5)]がある。これは「木を真ん中に置いた子育て・子育ち環境を整備し，子どもをはじめとする全ての人たちが，木の温もりを感じながら，楽しく豊かに暮らしを送ることができるようにしていく取り組み」であり，2011（平成23）年から自治体の，2012（平成24）年からは企業による事業が始まった。自治体版ウッドスタート事業は，具体的には「誕生祝い品事業」（必須項目）の他，任意項目として「木育キャラバンの開催」,「子育てサロン木育化事業」,「木育インストラクターの養成」,「木育円卓会議の実施」,「姉妹おもちゃ美術館の設立」などがあり，条件を満たすことによって「ウッドスタート宣言自治体」となる。2016（平成28年）年の調査当時，全国では17市町村が「ウッドスタート宣言」をしており，宮崎県では１市１町（N市，A町）がウッドスタート宣言をしていた。宮崎県は県土の76％を森林が占め,素材生産量は北海道についで全国第２位という林業県であり、N市もA町も林業や木工業が盛んな自治体である。しかしながら,N市は2017（平成29）年，A町は2018（平成30）年にウッドスタート宣言を終了していた。N市は，木質化に特化した子育て支援センターでの活動に引き継がれていた。2020（令和２）年現在，全国では，自治体51・企業27・幼保育園21の団体がウッドスタート宣言をしているが，宮崎県内でウッドスタート宣言をしている自治体はない。

これまで,「木育」の子育て支援としての可能性や学習題材としての教育的な効果に関する研究は多く報告されているが[6-9)]，ウッドスタート事業の実態や効果に関する研究は少ない[10)]。そこで，本研究では，2016（平成28年）に宮崎県におけるウッドスタート事業の実態と課題を明かにするために，実施自治体へのインタビュー調査や，保護者に対する質問紙調査を実施したので報告する。

2．調査方法および調査概要

（1）調査対象者と調査内容

2016（平成 28）年 10 月～ 12 月に

(1) ウッドスタート事業実施（宣言）自治体担当者への面接調査

(2) ウッドスタート事業未実施自治体への質問紙調査

(3) ウッドスタート事業を受けた保護者への面接・質問紙調査を実施した。

実施方法ならびに調査内容は，(1) は書面にてインタビュー調査を依頼し，担当者から，主な活動内容やスタートの経緯，課題についてお話を伺った。(2) は，未実施自治体 24 ヶ所に郵送にて質問紙調査を依頼した。回収数 13 部（回収率 54.1％）であった。調査内容は，1）ウッドスタート事業の実施状況(自治体によってはウッドスタート事業の宣言をしていなくとも，誕生祝い品などの事業を実施している場合もある)，2）未実施の理由，3）ウッドスタート事業への意識，4）木育活動の実施状況である。(3) については，子育て支援センターや乳幼児検診, 保育所を利用している保護者に, インタビュー調査と質問紙調査（手渡し配布･郵送回収）を行った。インタビュー調査については, 両親や祖父母など一家族から複数の回答が得られた。質問紙調査については，配布数 125 部（N 市 66 部，A 町 59 部），回収数 116 部（N 市 58 部，A 町 58 部），回収率 92.8％であった。調査内容はインタビュー調査では，子どもの様子を中心に話しを伺った。質問紙調査では，1）ウッドスタート事業の満足度，2）誕生祝い品受け取り後の意識や行動の変化，3）ウッドスタート事業への意識，4）子育て支援についてである。

（2）倫理的配慮

本調査では，調査の趣旨と個人情報の保護等の倫理的配慮について対面ならびに書面で説明し，回答をもって同意とみなした。

（3）統計処理

統計処理には IBM SPSS Statistics Ver.23.0 を用いた。

3．結　果

（1）宮崎県内のウッドスタート事業の実施状況

県内のウッドスタート事業宣言自治体は 1 市 1 町であったが, 2 自治体が「誕生祝い品事業」(1 自治体は 1 年間積み木を配布，他方は不明）を，1 自治体が「子育てサロン木質化事業」を実施していた。「誕生祝い品事業」を実施していない自治体からは「予算の確保が難しい」,「事業そのものを知らなかった」,「他の子育て支援を行っているので必要なし」などの回答が得られた。

一方，ウッドスタート事業宣言自治体である「N 市」は宮崎県の南東部に位置し，造船用の飫肥林業が盛んな地であった。「A 町」は宮崎県の中西部に位置する「有機農業の町」,「照葉樹林都市」などをスローガンとする「日本で最も美しい村連合」の一つであり，木工業が盛んな土地である。いずれも以前より「木育イベント」等が開催されていたことが，ウッドスタート宣言につながっていた。

写真１「うごくぞー」（日南市 HP　許可転載）

１）N 市の誕生お祝い品事業について

N 市は，誕生お祝い品事業として，木のおもちゃ「うごくぞ－」（写真１）を配布していた。主な活動内容について表１にまとめた。

表１　N 市の主な活動内容

開始日	2015（平成 27）年 4 月	出生数	357 人/人口 54,090 人（2015）
実施内容	赤ちゃん誕生祝い品事業， 木育キャラバンの開催	参考 自治体	東京都新宿区・長野県塩尻市（配布時期など）
担当部署	水産林政課，子ども課	予算	2,300,000 円 2016（平成 28）年度＋書籍代
配布時	毎月第 1 木曜日 3 か月健診	総配布数	2015（平成 27）年度：400 2016（平成 28）年度：420
配布物	木のおもちゃ「うごくぞー」（5,000 円） 書籍「赤ちゃんから始める木のある暮らし」（1,200 円・税別）		
選定経緯	ウッドスタート宣言をしてからあまり時間がなく，以前から付き合いがあり，かつ，同じ時期にウッドスタート宣言を行った内田洋行に依頼したとのことであった。飫肥杉の肌触りを重視し，子ども達が遊びやすい形にした。赤ちゃんが認識しやすいように，安全な塗料で鼻や足の部分を赤色した。また，飫肥杉の肌触りを重視したかったので，本体は無塗料のままにした。		
説明	子ども課健康係の保健師が 3 か月健診時の最後に全体に事業の概要について説明する。また，リーフレット（説明書）では，デザインのきっかけや安全性の説明がある。		
広報	特になし		
期待する効果	・子どもさんに木材に触れていただいて，木に親しみをもってほしい。 ・木材の良さを知って，将来家を建てる時に木材や木製品を選択するなど，木材の利用が増えてほしい。		
その他	・多胎児や年の近い兄弟の場合には，基本的には同じものを配布しているが，保護者の方にアンケートを実施しながら検討していきたいと考えている。 ・お子さんが入院されているなど健診に不参加の場合は，訪問してお渡ししている。 ・実施開始後まだ 1 年半しかたっていないので，配布後の各家庭の様子や意見を聴くには至っていない。 ・壊れた時には，基本的には各家庭で対応していただく。問合せがあれば相談にのる。		
他の木育活動	・婚姻届を出した際には「木のフォトフレーム」，小学校に入学した際には「日南キューブ」を贈呈する事業を行っている。 ・木育に特化した新しい「子育て支援センター」を 2017（平成 29）年 4 月に建設予定である。 ・センター内の職員のうち 6 名が「木育サポーター」の資格を有しており，「木のおもちゃで遊ぼう」は一番人気のイベントである。		

2）A 町の誕生お祝い品事業について

A 町の誕生お祝い品事業として，「赤ちゃん椅子」（写真 2）を配布していた。主な活動内容を表 2 にまとめた。

写真 2　A 町の「赤ちゃん椅子」の例　（小林撮影）

表 2　A 町の主な活動内容

開始日	2014（平成 26）年 11 月	出生数	65 人/人口 7,435 人（2015）
事業内容	赤ちゃん誕生祝い品事業， 木育キャラバンの開催	参考 自治体	秩父市誕生お祝い品
担当部署	産業観光課 （福祉保健課・町民係）	予算	991,000 円 （木の椅子：15,000 円＋書籍）
配布時	出生届が出された時	総配布数	2015（平成 27）年度：53 2016（平成 28）年度：44
配布物	誕生お祝い品「赤ちゃん椅子」（15,000 円）・5 種類の中から選択。 書籍「赤ちゃんから始める木のある暮らし」（1,200 円・税別）		
選定経緯	A 町は木工芸や手作りの里と言われるように昔から木工芸が盛んな町である。その中から，5 つの業者を A 町の方で選定して作ってもらった。デザインや材質の方は，職人さんの工夫や思いによってそれぞれ異なってくる。		
説明	・町民課の職員がお渡しするときに 2 分ほど説明をする。大事に使ってほしいという思いや A 町の工芸家さんたちが作っていることを伝える。		
広報	特になし		
期待する効果	・木の温もりや木の大切さを感じてもらいたいという思い。照葉樹林のような木に囲まれた，昔から大事にされたような街づくりを行ってきたので，身近に木の物があることで実際に照葉樹林の恩恵を受けた生活をしてもらいたい。 ・照葉樹林都市ということで，木の椅子を作ることによって工芸家さんの仕事も増えたらいいなという思いもある。		
その他	・多胎児であっても，出生児 1 人に対して 1 つというのが基本であるので，双子であっても三つ子であっても 1 脚ずつ渡している。 ・出生届が出された際に選んでもらうので，知らなくて驚かれる方が多い。 誕生後に引っ越してきた場合は対応していない。 ・実施開始後，事業が始まって 3 年目になるので，そろそろ保護者の反応を見てもいい時期かもしれない。 ・壊れた時には，基本的には各家庭で対応していただく。問合せがあれば相談にのる。		
他の木育活動	・森を育てる活動として，A 町内の子ども会の「上畑」自治会と「北苅」自治会の 2 つが「みどりの少年団」という団体をつくり，植樹や募金活動を行っている。その活動の 1 つとして「イオン財団」と連携して「植樹祭」を 3 年間にわたり行っている。 ・2013（平成 25）年に綾中学校を木造の建物として建て替えたのだが，そのときも町内の木を使った代わりに植樹の活動を行った。		

（2）ウッドスタート事業に対する保護者へのインタビューならびに質問紙調査の結果について

質問紙調査の回答者は，N 市は「母親」55 人（96.5%），「父親」2 人（3.5%），A 町は「母親」56 人（96.6%），「父親」2 人（3.4%）であった。家族・親族等で林業又は木に関する職種に携わっている人がいる保護者は，N 市 6 人，A 町 9 人の計 15 人（12.9%）であった。

1）ウッドスタート事業の感想や効果についての質問紙調査結果

誕生お祝い品受け取り前のウッドスタート事業の認知について 3 件法で尋ねたところ，N 市では「内容まで知っていた」が 8 人（15.1%），「名前は知っていた」が 7 人（13.2%），「知らなかった」が 38 人（71.7%）であった。A 町では「内容まで知っていた」が 7 人（12.1%），「名前は知っていた」が 4 人（6.9%），「知らなかった」が 45 人（79.3%）であった。N 市，A 町ともに，ウッドスタート事業を認知していた保護者は約 3 割以下であった。

ウッドスタート事業の感想について 7 項目を設定し，最も当てはまるもの 3 項目を選択してもらった（図 1）。両者ともに「木のぬくもりを感じることができた」，「木の良さを感じることができた」など「木」そのものについての感想が多くみられた。更に N 市では，「うごくぞー」を反映して「木のおもちゃは安心感がある」が約 7 割と高く，A 町では「椅子」を反映して「子どもが大きくなっても大切にしたいと思う」が約 4 割にみられた。

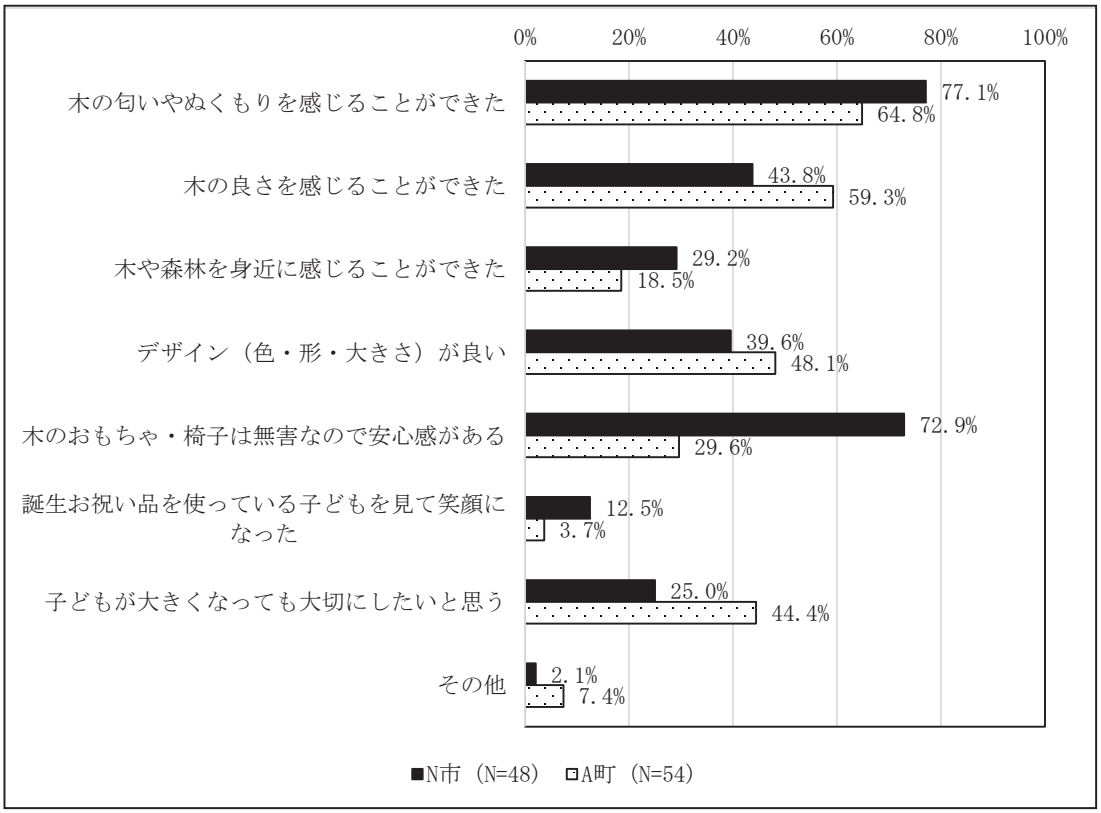

図 1 「誕生お祝い品」の感想

誕生お祝い品への要望としては，両者ともに「配布回数を増やして欲しい」が約 3 割，「他のお祝い品にして欲しい」が約 1 割みられた（データ未掲載）。

誕生お祝い品を受け取った保護者に，木のおもちゃや木製品についての意識や行動の変化について 5 項目を設定し，当てはまるものすべてを選択してもらった（図 2）。

両者ともに「木のおもちゃや木製品を手に取るようになった」が４割を超えて最も多かった。さらにＮ市では，「木のおもちゃや木製品のものがあれば使うようになった」も約４割，「木のおもちゃや木製品を購入するようになった」が約２割にみられた。Ａ町では，「木のおもちゃや木製品のものがあれば使うようになった」が約３割の他，「以前からしているので変わらない」も約２割にみられた。

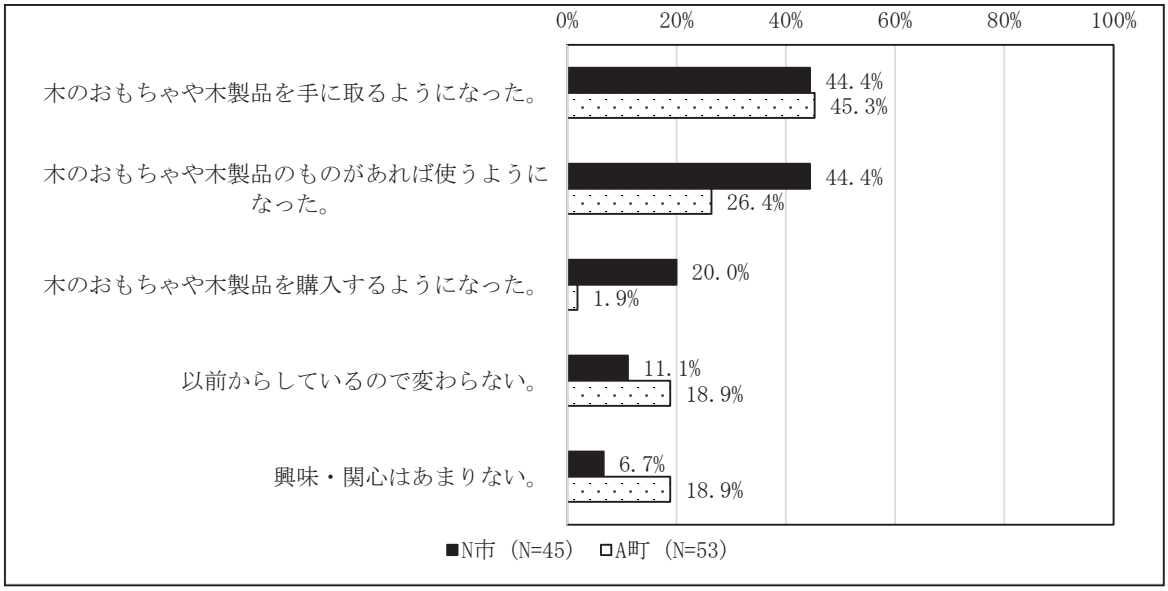

図 2　木製品に対する意識と行動の変化について

さらに，ウッドススタート事業の一環として行われている「木育イベント」への参加状況の変化を３件法で，林業の盛んな郷土へ愛着の変化を４件法で尋ねた（図 3-1，図 3-2）。

「木育イベント」への参加状況は，Ｎ市では，「以前から参加している」と「参加するようになった」を併せて１割と少なかった。一方，Ａ町では，「以前から参加している」は１割であったが，「参加するようになった」が２割も増加していた。これは，Ａ町では「木育ひろば」や「木工教室」が開催されていることに起因していると思われる。郷土への愛着は，両者ともに「以前から強い」が約 2.5 割みられたが，「より一層強くなった」がＮ市では約２割，Ａ町では約４割と大幅に増加していた。

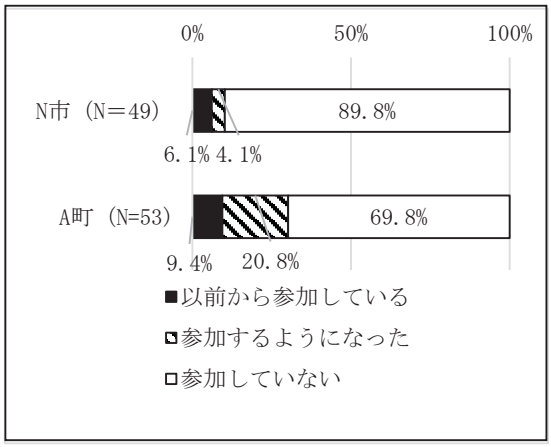

図 3-1　木育イベントへの参加状況

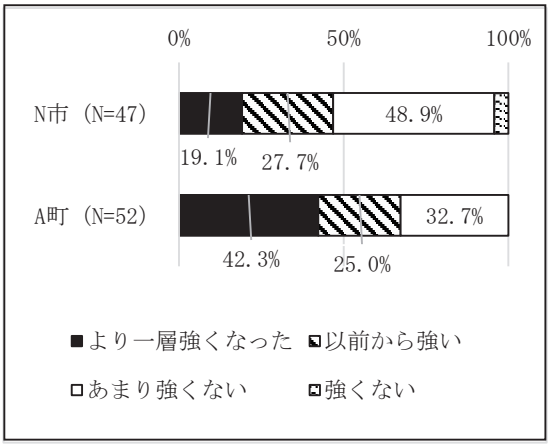

図 3-2　郷土への愛着

ウッドスタート事業は森林保全も目的としていることから，環境への意識・行動の変化について尋ねた（図 4）。両者ともに，「節水・節電をするようになった」が高く，N 市では 4 割，A 町では約 6 割であった。次いで「エコバックを利用するようになった」が N 市では約 2 割，A 町では約 5 割であった。しかしながら，まだ子どもが小さいせいか「森林保護活動に参加するようになった」は殆どみられなかった。

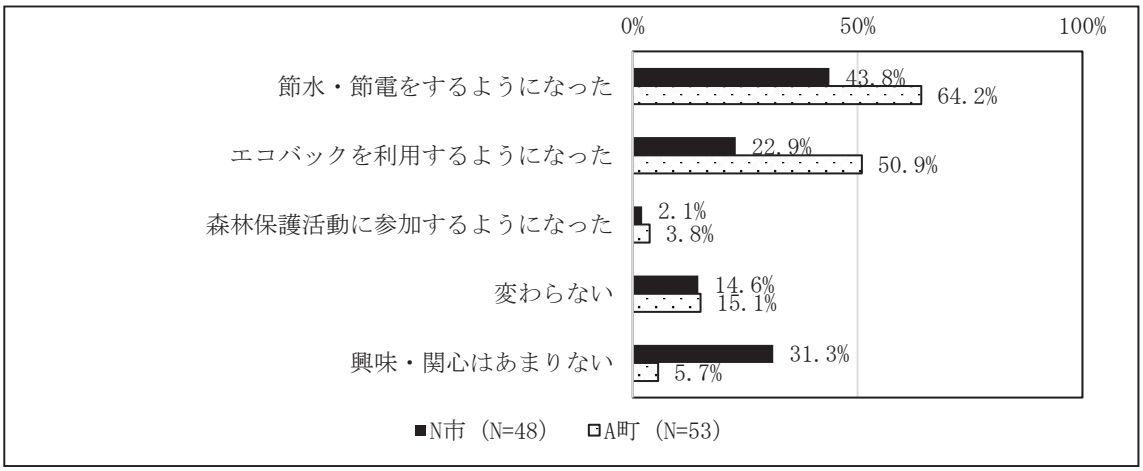

図 4　環境への意識

2）「誕生お祝い品」や「木育」についてのインタビュー調査ならびに自由記述結果

誕生お祝い品に対しての子ども達の様子や，保護者の感想・意見の一部を自治体別に表にまとめた（表 3-1 ～表 4-3）。「うごくぞー」については，遊べる月齢になると，楽しんで遊んでいる様子が窺えた。「赤ちゃん椅子」についても，自分用の椅子として使用されている様子が窺えた。保護者も概ね好意的に捉え，「うごくぞー」については，舐めることが多いので，安全性についての意見や形状についての要望もみられた。また，配布時期については，現在は「3 ヶ月検診時」に配布しているが，おもちゃを使い始める月齢となる時の「ピヨピヨ 10 ヶ月教室」での配布を希望する声も聞かれた。A 町でも，実際に椅子に座れるようになる「1 歳児検診」での希望が多かった。「木製品」や「木育」への期待も高いことが窺えた。

表 3-1　N 市の子ども達の様子

・4・5 か月の頃からつかんで，興味をもち始めた。
・半年が過ぎたころから，母親が転がしているのを真剣によだれを垂らしながら見て笑っていた。
・小さいからか手に持ったりなめたりしていた。最近は手で動かしている。
・おもに口に入れたりたまにコロコロ転がしたりしていた。
・次男が 7・8 カ月ごろに，長男が動かしているのをじっと見つめ楽しそうに真似をしていた。
・とてもお気に入りで，おむつを替えるときに使っている。
・長女が 0 歳の時はなめて遊んでいた。2 歳の兄はミニカーと一緒に転がして遊んでいた。
・もらった時は遊ばなかったので片づけていたが，1 歳過ぎてから噛んだりよだれをつけたりしながら遊んでいる。
・飽きがくるので次から次へと遊びを変えているが，笑顔で「うごくぞー」で遊んでいる。
・1 歳前後に動かして遊んでいたが，今はリアルな車に興味をもっているので遊んでいない。
・3 か月の頃からお気に入りで家の中の様々なところをなぞって動かしていたが，1 歳の頃投げてタイヤの部分が割れたので直したが，上手くタイヤが回らなくなってしまったので怒ってしまった。

表 3-2　N 市の保護者の感想

【良かった点】
・木なので安心だし，デザインも可愛いのでもらってからはリビングに飾っている。
・リビングのテーブルの上にお気に入りのおもちゃだけ並べてあって，その中の一つである。
・木のものが少ないし，木でできているので安心できるので嬉しい。
・一人目の時はなかったので，上の子と一緒に遊んでいるのが安心である。
・全く知らなかったので「木のおもちゃ」をもらった時は嬉しかった。
・赤色で鮮やかであるのが嬉しい。
・木に触れる機会が少ないので，良い機会になってよかった。
・使ったら丸みが出るので愛着がわく。

【改善点】
・小さすぎるとあたった時痛そうなので，もう少し大きくしてほしい。
・知育には木がいいとよく聞くが，落としたりぶつけたりした時は痛そうである。
・木の匂いはとても癒しになるが，安全のために角を丸くしてほしい。
・1 歳ごろに，噛むのが激しいので塗装などが心配である。
・塗装の部分をなめても大丈夫なのか分からないので飾っている。
・木に触れさせる機会がないので嬉しいが，アレルギーが心配である。
・姉妹で同じものがあるので，デザインを変更するか選択することができるようにしてほしい。
・女の子なので，車以外のものが良い。
・おもちゃも嬉しいけど「木の椅子」の方が使える。
・音がなる方が良い。
・小さい子どもでも持てるような細い部分がほしい。
・何通りかのおもちゃから選ばせてほしい。
・おままごとセットが良い

表 3-3　N 市の保護者の木育についての意識

【木のおもちゃや木製品】
・何か効果があったらいいなと思って木のおもちゃを買っている。
・お祝いに木の積み木をもらったのが嬉しかった。
・木のカラフルな積み木が家にあるので，崩れるときの音が気に入っている。
・木の匂いが好きで，家には木琴・たいこ・木のバッチなどがある。
・木の積み木があるが，温かみがあってとても良いと思う。
・積み木をお祝いでもらったのが嬉しかった。
・木を集めていて，木の車や歯固めなどをもっている。
・木の音が好きで集めているが，離乳食の木のスプーンは子どもの口に合っていないのでもっと小さいのがほしい。
・上の子や親せきの子のおさがりが多いので，木のおもちゃを意識したことはあまりない。
・木のキッチンを買おうとしたのだが，頭を打った時は危ないと聞いたので買おうかどうか悩んでいる。
・なるべく木の物を意識しているが，投げた時お友達にあたって怪我をさせないか，ガラスを割らないかが心配である。
・木のものは積極的に与えているが，市販のものは塗料などが心配である。

【木育イベント】
・木のおもちゃは積み木ぐらいでなので，木育のイベントに都合があったら参加したいと思う。
・子育て支援センター「おひさま」の方で 5 回ほど木育活動に参加させてもらって，木の香りや音に親子で癒された。
・木のボールで遊べるところを増やしてほしい。
・もっと木のおもちゃのイベントを増やしてほしい。
・木球プールで遊ばせたい。

【木育への期待】
・木に触れることによって，物を大事にする子に育ってほしい。
・木など様々なものに触って匂いや感覚を養ってほしい。
・汚れを気にせず自然に触れ合うことができるのは子どもの頃だけであるので精いっぱい遊んでほしい。
・木に触れて，おおらかに自然に育ってほしいと思う。

表 4-1　A 町の子ども達の様子

・食事の時に使っている。
・座るところが大きいので，座ってくるくる回ったり登ったりしている。
・食事の時に逃げないように机にはめて使っているが，嫌がらないのが不思議である。
・食事をしたり絵を書いたりするときに自分の椅子として持ってくる。
・椅子をもってきて台にして机の上の物をとっている。
・兄が使っていて，弟はまだ首が座っていないので使っていない。
・まだ使えないので実家で大人が使っている。足置きにしたり物置にしたりしている。
・可愛いので飾っている。首が座ったら使いたい。
・踏み台にしたり椅子に座って絵本を見たり，良く使用している。
・椅子に座れるようになる前は兄弟が使っていた。今では椅子に座れるようになったので，食事の時に使っている。腕を両方おける椅子にしたので，小さいころから椅子から落ちる心配もなく，木のぬくもりを親としても感じながら使わせてもらっている。
・長男は自分の椅子と認識しており食事用の椅子として今も使っている。とても気に入っている様子である。長女は長男と違う種類の椅子で背もたれの穴にボールを入れたりして遊んでいる。椅子として使うにはまだ不安定な感じがあるので使っていない。
・一人歩きをする前からつかまり立ちをしたりテーブル代わりにしたりして使っていた。座って食事をするときに使ったりもした。現在は遊ぶとき（つみきや車など）に座っている。
・食事の時やお絵かきする時絵本を読むときなど使う時に自分で持ってきて座っている。

表 4-2　A 町の保護者の感想

【良かった点】
・重さがあるので，簡単に倒れないのが嬉しい。
・木の椅子をもらっていたので家に 3 台あるが嬉しい。
・綾っぽい支援でとても嬉しい。
・椅子を買わなくてすむのでとてもありがたいし，種類があるのが嬉しい。
・椅子はあっても高さが良く机にはまるものがないので嬉しい。
・高価で丈夫なので嬉しい。
・壊れにくいし音も素敵である。
・自然の物であるのでやさしく温かみがある。
・木の感触を感じることができるので嬉しい。

【改善点】
・ひじ置きがある方がいいと思った。
・木の椅子もいいが音のなる椅子の方に興味を示していることの方が多い。
・出産後 1 か月ぐらい入院していたので知らなかった。
・在庫がないと言われたので，人気のもの 1 つにしてほしい。
・滑りやすいのでクッションをつけられるようにしてほしい。
・不安定で転びやすいので改善してほしい。
・滑り落ち防止のバンドなどもなく，安全面にはもっと気を配ってほしい。
・子どもは椅子を気に入っているのだが，椅子が重くて椅子を運ぶのに苦労している。たまに足の上に落ちたり，椅子の重さで一緒に倒れたりしている。

表 4-3　A 町の木育についての意識

【木のおもちゃや木製品】
・木のものが好きで友人の贈り物として渡すと喜ばれる。
・木のおもちゃは，電車やパズルなどがあり買うようにしている。
・木はいいとはよく聞くけど，具体的には分からない。
・ひらがなのつみきや手押し車をもっているが，母親のおさがりで買ってくれた祖母も孫が使っていて喜んでくれている。
・木のキッチンセットが当たったので持っているが，子どものお気に入りである。

【木育への期待】
・ゲームでなくて自然で遊んでほしい。

A 町では，赤ちゃん椅子の制作者 3 氏にもインタビュー調査を行ったので，制作者の思いについて表 5 に示す。3 氏共に A 町の依頼を受け，デザインや安全面に留意し，子どもの成長を願って経済性は度外視して取り組んでおられた。

表 5 「赤ちゃん椅子」制作者の思い

制作者	「赤ちゃん椅子」制作への思い
M 氏	・デザインに関しては，気分によるがシンプルさには気を付けている。両肘置きのある子どもの椅子もあったが，大きくなると使えないので，両肘置きがない椅子も作っている。 　また，オイル塗装や角を作らないこと，金具は使用しないことに気をつけて，安全性は考慮している。木材に関しては，注文を受けた時にあるものを使うので，決まっていない。 ・「赤ちゃんの椅子」は小さい時しか使えないが，思い出としてずっと残してほしいと思うし，一代だけでなく子どもや孫に回っていったらいいなと思う。また，木の椅子を通して，親から子どもへ「A 町の木」について話をしたり，「大事に使っていこうね」という会話が生まれたりしたら嬉しい。 ・「木育」に関しては，昔は木のある生活があったが今は違うので，木の温かみを感じる心を育ててほしいと思うし，すぐに効果はみえないので長い目で見ていきたいと思っている。
S 氏	・デザインは，人が考えないようなものが作りたいので，その時思いついたものを作っている。第一に安全には気を付けた。化学塗料を使わずに，アトピーなどにも気を付けたり，椅子の足を斜めにして倒れにくい工夫や，子どもがけがをしないようにしている。また，木材はカヤの木を使っているので殺菌力が強く，なめたりしても清潔に使っていける。 ・1 人だけでなく，2 人目や 3 人目の子どもも長く使ってほしい。また，大人になった時，椅子を見て子どもの頃を思い出してくれたら嬉しい。 ・「木育」に関しては，もっと学校の行事に「木を触れ合う活動」を取り入れてほしいと思う。木をみて自然の中で育った子どもは「素直」な子に育つと思う。
T 氏	・両肘置きがない方がいいと言われたのだが，子どもが食事の時に逃げ出さないようにした方が良いと思う。ただ，4 歳までが限界であるのが仕方ないのかなと思う。また，指を挟んだりとがったりしないようにしているし，子どもが振り回すことができないある程度の重さは大切にしている。塗料に関しては，アルコール系の自然の塗料を使っていたが，シミが残ると長く使えないので，今はウレタン系（有害ではない）の塗料を使っている。 ・まず，第 1 に怪我だけはしてほしくないと思っている。木製品に親子ともども親しみをもってもらえることは嬉しいことではあるが，子どもがすくすく育ってくれることが 1 番だと思っている。

（3）ウッドスタート事業の子育て支援における効果について

ウッドスタート事業実施の子育て支援における効果について，宣言都市 2 自治体の保護者と，未実施自治体に 4 件法で尋ねた（図 6）。「親子のコミュニケーションづくり」，「子どもの感性・知性の発達」，「地場産業支援の促進」，「環境への意識の促進」の 4 項目では，N 市・A 町の保護者の 9 割が「とても有効･有効」と捉えていた。また，「男性の育児参加の促進」，「保護者の育児不安の軽減」についても 5 割の保護者が「とても有効・有効」と捉えていた。

一方，未実施自治体も「とても有効」は少ないが，「親子のコミュニケーションづくり」，「子どもの感性･知性の発達」，「地場産業支援の促進」，「環境への意識の促進」の 4 項目は「有効」と捉えていた。保護者回答と対照的なのは，「出生率の増加」，「男性の育児参加の促進」，「保護者の育児不安の軽減」であった。保護者からは肯定的な意見がみられたのに対して，未実施自治体は否定的な意見であった。特に保護者は，木のおもちゃや椅子から，安心や癒しを感じ「育児不安の軽減」に 5 割以上の方が「とても有効・有効」と回答したと思われるが，未実施自治体は「あまり有効でない」が 6 割，「有効でない」が 4 割の回答であった。

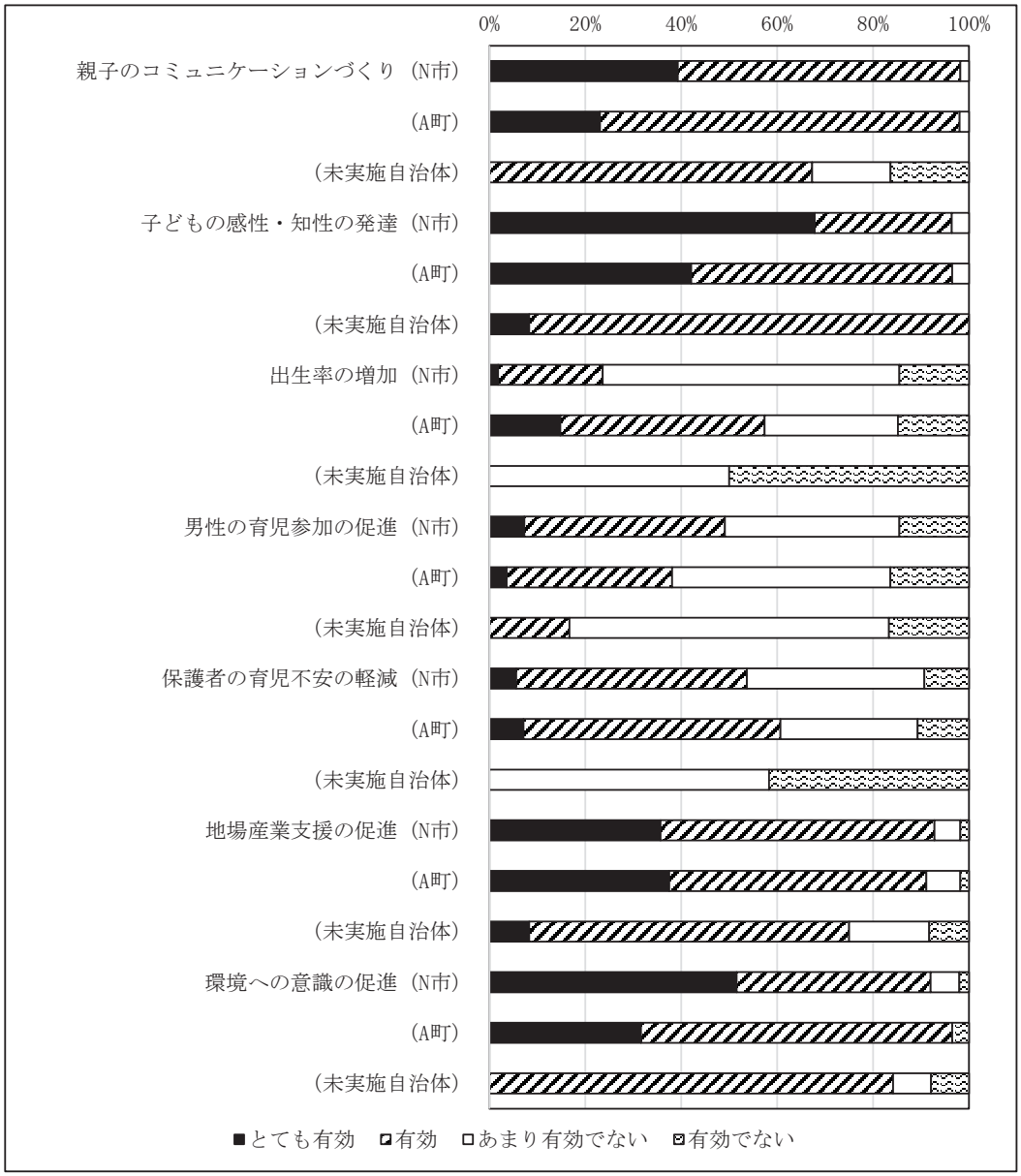

図 5　子育て支援における効果

4．考　察

今回の調査では，宮崎県内のウッドスタート事業に関して「実施自治体（N 市･A 町）」,「未実施自治体」,「実施自治体の保護者」の三者の立場から意識やその効果について検討した。

2011（平成 23）年から自治体版ウッドスタート事業が開始し，N 市が 2015（平成 27）年，A 町が 2014（平成 26）年からウッドスタート宣言都市となった背景には，飫肥杉や照葉樹林など森林資源が豊富で，木工技術が発展しており，以前から「木育イベント」等が行われていたことが明かとなった。

両自治体の保護者は,「誕生お祝い品」についての認知度は低かったものの，約 7 割の方が

「木のぬくもりを感じることができた」と回答し，この事業に対して肯定的に捉えていることが明かとなった。子ども達も木のぬくもりを感じ，N 市では，「うごくぞー」に安全な塗料を使用していることや，対象年齢が低くなめる子どもが多いこともあり，「安心感」があるとの評価が高かった。しかし，「角がとがっているため危ない」という意見も多く，安全面での配慮が必要である。さらに子どもが「うごくぞー」に関心を持つ時期も限られており，配布時期の検討や他の品を要望する声も聞かれた。A 町では，「赤ちゃん椅子」は対象児だけでなく，高齢者用の座椅子や花瓶置きなどにも使用されていることから，「子どもが大きくなっても大切にしたい」という思いにつながっていると言える。また，「赤ちゃん椅子」は 5 種類の中から選択が可能であり，デザインも異なるため，「安定感がある」という意見の一方で「不安定である」という対称的な意見もみられた。保護者は「木製品」や「木育」への期待も高く，概ね「木の温かみや親しみをもってほしい」，「照葉樹林の恩恵を受けた生活のきっかけにしてほしい」という自治体の思いが伝わっていると言える。「赤ちゃん椅子」制作者の方々も，経済面を度外視して，安全面に配慮し，「大切に長く使ってほしい」という強い思いで活動されていた。このような制作者の思いがメッセージカードなどの形で保護者に伝わる取り組みがあれば，「赤ちゃん椅子」を介した人と人のつながりや，木や森とのつながり，ひいては地場産業の活性化にもつながる可能性もあろう。

N 市ではデザインや製作過程を企業に委託していたが，「みやざき高校生木育プロジェクト」のデザインを採用したり，「obisugi-design」の木のおもちゃを使うことにより，地場産業の促進にもつながっていくと考える。

今回の調査結果から，ウッドスタート事業は郷土への愛着や環境への意識の向上にも効果があることが明らかとなった。N 市では，約 6 割の保護者が「木のおもちゃや木製品を購入するようになった」，「木のおもちゃや木製品を手に取るようになった」と回答していた。しかしながら未だ「森林保護活動」などの行動にはつながっていなかったのは、今回の対象者は乳幼児を持つ保護者が対象であったことも要因の一つと思われる。小国町のウッドスタートにおいても，「誕生祝い品を渡すことが森づくりや木の役割の認識につながっていないのではないか。木のおもちゃを新生児に渡すことの意味が地域住民に伝わっていないのではないか」[10] と懸念されていたが，ファーストトイとしてその子のための木のおもちゃ・木製品に触れることが木育の第一歩であろう。

保護者の中には，「配布回数を増やしてほしい」という意見も多くみられたが，自治体の課題として「予算」の問題が挙げられており，木のおもちゃを「パズル」や「ブロック」に変更することで，子どもたちも長く遊べる可能性があろう。また，どちらの地域でも実施している「ブックスタート」事業の中で「木育の絵本」の配布による木育もあろう。

2020（令和 2）年現在，宮崎県内ではウッドスタート宣言自治体はないものの，「木づかいイベント」，「木育キャラバン」など木育･木材利用の普及活動が各地で行われていた。さらに，日南市の子育て支援センター「ことこと」を始め，小林市の TENAMU 交流スペースの「もくもく」や都城市子育て世代活動支援センター「ぷれぴか」など，子ども達が木のおもちゃや遊具で遊べるスペースも増えてきている。高橋は，「子ども達が木のおもちゃに触れた途端に，なんとも言えないうれしそうな表情を見せ，いきいきとおもちゃとかかわっていた」[11] と報告しているが，このような子ども達への影響は，「親子のコミュニケーション作り」や「育児不安の軽減」につながるものであろう。

本調査と並行して，宮崎県内の木育活動に参加し，運営者，参加者の思いや考えについてのインタビュー調査や、子どもたちの様子についての参与観察を行った（データ未掲載）。参加者は木育への関心，意識が高い人が多く，高橋が「木育はまさにそのつながりを育むことを目的としている」[11] と報告したように，木育活動が「つながりの場」となっていることが観察された。参加者の中には，親子で協力してローチェアを作ったり，作った作品を子どもが親に一所懸命説明したりしている姿がみられた。また，保護者同士でも子どもの成長や子育ての悩みを話し合っている姿がみられ，保護者同士のつながりの場としての効果も期待された。保護者の思いとして「木の温かみを感じてほしい」,「家や学校でなかなかできない体験をしてほしい」などが多く，子どもたちは五感を使って全身で「木」を感じる姿がみられた。木材にやすりをかけた後の手触りの違いや木目，匂いの違いを感じ，1 日中木の椅子作りに熱心に取り組む子どもの姿もみられた。このような活動は, 運営されている方の「自由に個性を表現する場であってほしい」,「子どもたちに木の大切さを気付いてほしい」などの強い思いでされており，その思いは子ども達に伝わっていると思われた。一方で，参加者が限定的なものや人手不足，技術的な指導ができる人が少ないという課題も聞かれた。現在，学校教育の中でも「木育」が取り入れられていることから, 教員養成系学生の「木育ボランティア」の養成なども必要であろう。

今後は，家庭，学校，自治体，企業などの連携により，我が国の木の文化を伝承する「木育」が，広い世代で推進されることを願う。

謝　辞

本研究の遂行にあたり，N 市，A 町の自治体，保護者の方々を始め，制作者の方や木育ネットワーク部会など多くの方々にご協力いただきましたことに感謝申し上げます。

5．引用文献

1) 木育推進プロジェクトチーム：木育　～木とふれあい，木に学び，木と生きる～ . 平成 16 年度協働型政策検討システム推進事業報告書 . (2005).

2) 林野庁：森林・林業基本計画 . https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/plan/pdf/kihonkeikakuhontai.pdf　(2006).

3) 林野庁：森林・林業基本計画 . https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/plan/attach/pdf/index-2.pdf (2016).

4) 芸術と遊び創造協会ホームページ:http://goodtoy.org/about/history.html　（2020 年 10 月 20 日閲覧）.

5) 木育ラボホームページ：https://www.mokuikulabo.com/　（2020 年 10 月 20 日閲覧）.

6) 安梅勅江，冨崎悦子，望月由妃子：子どものすこやかな発達と子育て支援への「木育」効果の活用可能性 . 厚生の指標 59(1): 21-25. (2012).

7) 長南あずさ，橋森祐介，浅田茂裕：小学校における木育の実践 . 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 (15): 99-104. (2016).

8) 大内毅，西村修平：小学校における木育の実践とその効果（1）―学外施設を活用した取り組みについて―. 福岡教育大学紀要 . 第六分冊 , 教育実践研究編 (67): 1-5. (2018).

9) 長南あずさ，小川毅，浅田茂裕：学校教育における木育プログラムの在り方について . 埼玉大学教育

学部教育実践総合センター紀要 (17): 123-128. (2019).
10) 平田菜生，興梠克久：地域の森とヒトをつなぐ木育：熊本県小国町のウッドスタート事業を事例に . 木材情報 (347): 19-22. (2020).
11) 高橋真由美：日本保育学会五十九回大会に参加して (1)：木育フォーラムを振り返る―木育が伝えるぬくもり・つながり―. 幼児の教育 105(11): 48-53. (2006).

(2020 年 10 月 23 日受理)